

*Finnegans Wake*における ALP の独白
 — ケルトとエジプトの Other World —

下川 理英

ALP's Last Monologue in *Finnegans Wake*
 — Celtic and Egyptian Other World —

Rie SHIMOKAWA

(Received October 28, 2022)

1. はじめに

ジェイムズ・ジョイス (1882-1941)の作品『フィネガンズ・ウェイク』(1939, 通称 *FW*)の第4章の最終盤 (*FW*619. 21 ~628) ALPの独白に見られる東洋のイメージ, とりわけ古代エジプトのそれについて言及する。『フィネガンズ・ウェイク』の執筆当時に流行していた古代エジプト文化(特にオシリス神話)をジョイスはどのように受容していたか紹介する。また, other world に着目し, 古代エジプトの『死者の書』に見られる other world とアイルランドのそれを比較しつつ, ジョイスが「鍵」をキーワードにしてどのようにリンクさせ, 円環のストーリーを完成させたか考察する。

2. delth の向こう側

リフィー川の源泉から川を流れてきた ALP は大いなる海に注ぎ込む直前に次のように述べる。

How you said how you'd give me the keys of me heart. And we'd be married till delth to uspart. And though dev do espart. O mine! Only, no, now it's me who's got to give (*FW* 626, 強調は筆者)。

delth は death (死) と解釈して「死が私たちを分かつまで」と婚姻の誓いのように捉えることが多い。しかし ALP が川を流れ, 海に流れ, 蒸発をして雨となって再び泉の水となって川を流れる循環する生命を象徴するなら delth を delta (三角州) と読み「三角州が私たちを分かつまで」と解釈する余地が出てくる。三角州の向こうに広がる海は父や夫がいるだけでなく, ALP の女性と

してのあらゆる側面である少女, 娘, 妻, 母, 老女が混じりあって輪廻を繰り返す場所であり, そこは生者が日々の営みをする「三角州のこちら側」の世界とは異なる場所, すなわち other world (異界) と呼ぶことが可能となる。

I wisht I had better glances to peer to your through this baylight's growing. But you're changing, acoolsha, you're changing from me, I can feel. Or is it me is? I'm getting mixed. Brightening up and tightening down. Yes, you're changing, sonhusband, and you're turning, I can feel you, for a daughterwife from the hills again. (*FW*626 - 627, 強調は筆者)

川の向こうでは生命は変わり続け, 様々な立場, 役割, アイデンティティーが混じりあっていく。上記の引用にあるように変容を続ける生命は個を越えて sonhusband (息子であり夫) であり daughterwife (娘であり妻) になる。その姿は ALP のだけでなくイッシーがレインボーガールやリープガールなど多数の人格を持って物語に表れることに通じる。イッシーの姿はジョイス自身が娘のルチアが統合失調症に苦しむ姿に向き合ってきたことも背景に見られる。¹⁾

3. エジプトの other world (異界)

other world (異界) は伝統的なアイルランド民話に見られ, アイルランド文学が始まる中世より現在におけるまで通底しているテーマである。²⁾ また今回取り上げている古代エジプトにも other world があり, それは黄泉を指す。ラーセンによるとアイルランドの東洋志向は,

¹⁾ 山田 『フィネガンズ・ウェイク』の父と娘 — イッシー, レインボウ・ガールズ, ルチア・ジョイス」79-

83.
²⁾ Tymoczko 179-189.

西洋（ヨーロッパ）との差異を示すためにケルト文化や言語がフェニキアや地中海諸国、アフリカと類似していることを（科学的根拠はないのに）表明するものだった。すなわち、アイルランドのケルト文化は長年、異教で野蛮なもの、と西洋の人々に言われてきたが、アイルランド人はそれを逆手に取るように自らを東洋起源と結びつけることで西洋ではない特異な特性を持った存在としてのアイデンティティーを持っていると主張した。古いものだとスペンサーの『アイルランド現況概説』(1596)が有名である。また近代になると the Royal Irish Academy の創立者ヴァランシーがアイリッシュ・オリエンタリズムとしてアジアとアイルランド（ケルト）の繋がりを主張。19世紀になるとトマス・ムアが長詩「ララ・ルーク」(1817)を発表したり、マンガンがアジア風の詩を書いた。彼らの活動の原点は、アイルランドは宗主国と異なる文化背景を持っていると主張することで、アイルランド人としてのアイデンティティーや愛国心を醸成した。³⁾

上記のような背景の中で、1869年にスエズ運河が完成し、イギリスとフランスが覇権を争っていたエジプトはピラミッドの発掘と相まってヨーロッパの人々の関心を集めた。同時期にヘレナ・ヴラヴァツキーが『ヴェールを剥がれたイシス』(1877)やフレイザーが『金枝篇』(1890)を発表し、太陽神ヘルメスとエジプトのトト神を同一視するヘルメス協会が流行した。アイルランドでもイエイツや AE などが入会し、ケルトの神秘主義として大いに隆盛した。FW の中でもシエムとショーン、イッシーがオシリス神話に登場するオシリスとセト、そしてオシリスの妹であり妻であるイシスに対応することは知られている。ジョイス自身も大いに当時のエジプトブームに関心を持っていたと思われる。実際、彼は博物館のパフレット『死者の書 挿絵 25 点』やクロスビーが所有していたバッジが英訳した『死者の書』3 巻本を手に入れている。⁴⁾

特に本論で言及する『死者の書』は元来、死後の生を願う呪文で副葬品の一つである。死者は黄泉の国の支配者オシリスにより生前の行いと遺族が死者を弔い、残してくれた副葬品から永遠の生を享受できる世界（other world）へ行けるか裁かれる。死者は遺族たちにきちんと弔われていないと魂の再生（other world に渡る）はできないと考えられており、盛大な通夜を行う習慣がある。この習慣は死者を弔うために大宴会を開き、来世への旅路を祈る伝統的なアイルランドの通夜（wake）に共通している。

古代エジプト人の考えでは死者たちは地下に存在すると考えられていた黄泉の国で夜の間に活動はでき

ない。太陽神ラーが生者の世界を照らし地平線に沈むと巡回する形で黄泉の国を照らす。その間のみ死者は生活ができるのである。『フィネガンズ・ウェイク』は HCE が夜の間に見ている夢の話であるが、エジプトの『死者の書』に関連させて解釈するなら、永遠の生の世界である other world に渡る前の黄泉の国での話である、と考えることができる。

古代エジプト人は、来世は 2 つあると考えていた。ひとつめは「無限の生」と呼ばれるものでオシリスにより生前の行いが裁判にかけられ、行いが良ければトトから超人的な力（再生する能力）を授かり神の一人として楽園で暮らすことができる、というものである。2 つめは「循環する生」と呼ばれるもので、オシリスによる裁判で生前の行いが悪いということが分かるとアミメト（頭がワニ、上半身がライオン、下半身がカバ）に心臓（=魂）を食べられてしまい第二の死を迎える。そして来世での活動は太陽神ラーに支えられている、と考えられていた（図 1. 参照）。すなわちラーが船に乗って地下にある黄泉の国を巡回する時のみ死者たちは起き上がって活動でき、それ以外の時は死者の国の支配者であるオシリスに守られている（図 2. 参照）。人々は死後、楽園に行くことを目標にして生前は善い行いをし、死後は「無限の生」の来世に渡るための盛大な通夜と葬式をしてもらうことを至上命題としていた。

4. 鍵とアंक

この章では、エジプトの壁画によく描かれる鍵の形をしたアंकが ALP の独白の中でどのように扱われているか考察する。図 1. と図 2. 共にアヌビスやラーも手に大きなアंकを持っている。アंकは「生命の象徴」として知られているが、同時に「永遠の生命の鍵」の象徴でもある。死後もなお楽園で生きることを願うエジプトの人々にとってアंकは重要なものであった。『フィネガンズ・ウェイク』では ALP が HCE に対して次のように語りかける。

How you said how you'd give me the keys of me heart. And we'd be married till delth to uspart. And though dev do espart. O mine! Only, no, now it's me who's got to give. (FW 626, 強調は筆者)

上記の引用は「あなたが私の心臓（=魂）の鍵をくれた。…私が（鍵を）もらったのよ」と解釈すると父であり HCE であり全ての死者たちが住む海に流れ込むこと

³⁾ Leerssen 168-171.

⁴⁾ 山田『ジェイムズ・ジョイスと東洋—「フィネガンズ・ウェイク」への道しるべ』197.

で永遠の生命を得たことが暗示されている。

永遠の生命を得るということは、何度も生と死の循環を繰り返すことを意味する。『フィネガンズ・ウェイク』のストーリーは以下のような最後を迎える。

Finn again! Take. Bussoftlhee, mememormee!
Till thousandsthee. Lps. The keys to. Given!
A way a lone a last a loved a long the (FW 628,
強調は筆者)。

「また終わるのよ！」で始まり、最後は”the”で終わり、この”the”はテキストの冒頭に繋がりにストーリーが円環になることは知られている。だからこの文脈では、「また終わるのよ！」の中に「また始まるのよ！」と次の再生の意味も含んでいる。また”mememormee (= memento mori (死を忘れることなかれ)) (FW 628)” のすぐ後に”Till thousandsthee. Lps. The keys to. Given! (何千ものあなた. ルプス. 鍵はもらったわ!) (FW 628)” とある。つまり輪廻転生を繰り返し、いくつもの生を体験してきた HCE から永遠の生命の鍵をもらい、ALP もまた永遠の生を得ていく過程がここでは描かれている。

5. アイルランドの other world (異界)

古代エジプトの other world は死者たちの楽園またはオシリスに守られて生きる黄泉の国として描かれ、生者はその中では存在しない。厳然と this world (この世) と other world の間には境界がある。一方のアイルランドのそれらは生者が other world に迷い込んで浦島太郎のように不思議体験をして戻ってきた時には何百年も経っている場合があるし、もちろん other world の住民が生者の世界にやってきて悪さをしたり現世を懐かしんだりすることもある。2つの世界は行き来が可能で境界は曖昧である。だから筆者が今回取り上げている河口の三角州はまさに川の水と海水が混じりあい、川と海の明確な境界はない。ジョイスは2つの世界は並びあって存在して、魂は自由に往来している、と考えていたのではないだろうか。その姿勢は『ダブリン市民』の「死者たち」の最後のシーンにも表れている。

A few light taps upon the pane made him turn to the window. It had begun to snow again. He watched sleepily the flakes, silver and dark, falling obliquely against the lamplight. The time had come for him to set out on his journey westward. Yes, the newspapers were right: snow was general all over Ireland. It was falling on every part of the dark central plain, on

the treeless hills, falling softly upon the Bog of Allen and, farther westward, softly falling into the dark mutinous Shannon waves. It was falling, too, upon every part of the lonely churchyard on the hill where Michael Furey lay buried. It lay thickly drifted on the crooked crosses and headstones, on the spears of the little gate, on the barren thorns. His soul swooned slowly as he heard the snow falling faintly through the universe and faintly falling, like the descent of their last end, upon all the living and the dead.

(Dubliners 223 - 224, 強調は筆者)

「西方に旅立つ時が来た」とゲイブリエルが考えるが、ここでの「西方」とは妻のグレタの故郷ゴールウェイを指すだけでなく other world がある方向である。妻の心に死者(初恋の Michael) が生き続けている。それはマイケルが other world からグレタのところにやってきているのか、またはグレタの魂が other world に行ってしまったのか、さまざまな解釈の余白を残す。そして「生者の上にも死者の上にも雪が宇宙から静かに降る」美しいシーンでストーリーは終わるが、まさに other world は this world の westward (西方) に位置し、同じ地平線上に隣り合って存在していると考えることができる。

アイルランドの other world に対して this world (この世) は mortal world と表現され、生者はいずれ死を迎える場所である。一方の other world は「死」のない永遠の(生命の)地であり、そこに住む一見魅力的な人々はこの世に住む人々に敵対心を持ち illusion (幻想) や transformation (変身) を使っていたらずら(復讐)を繰り返す。魅力的な姿で生者を惑わし破滅へと導く人物は、『若き芸術家の肖像』では bird girl やステューヴンを惑わす売春婦の姿で描かれている。またアイルランドの other world は「西の海の向こうにある死者の島」という意味があるが、そこに住んでいる限りある生命にとらわれない人々は古代エジプト人の考える楽園の住人ではないし、黄泉の国の支配者に守られながら循環を繰り返す死者でもない。三角州の向こう側である other world では生と死が混じりあい蓄積していくうちに個がなくなり、生命の循環の始まりである雨となってリフィー川の源流があるウィックローに降り注ぐ。こうして『フィネガンズ・ウェイク』の円環のストーリーは完成する。

6. おわりに

本稿では、ALPの独白の中に見られる「鍵」をキーワードにしてエジプトのオシリス神話および other world との関連を探った。アイルランドで伝統的に受け継がれている other world とアイルランド人の想像と理想が入り混じったアイリッシュ・オリエンタリズムが、ALPの「鍵＝アネク」に表れていると考えることができる。『フィネガンズ・ウェイク』の作品全体にちりばめられている東洋のイメージが物語の解釈に多様性・多重性を加えている。本研究がジョイスの東洋への視線を考察する一助になれば幸いである。

また、本論は2021年6月12日にオンラインで開催された第33回日本ジェイムズ・ジョイス協会研究大会でのシンポジウム『フィネガンズ・ウェイク』ワークショップ：アナ・リヴィアの独白を読む(619.21-628)での発表に加筆修正を加えたものである。シンポジウムの司会を務めた立教大学名誉教授の山田久美子先生には、研究にあたり多くのご指導を賜りました。この場を借りて感謝申し上げます。

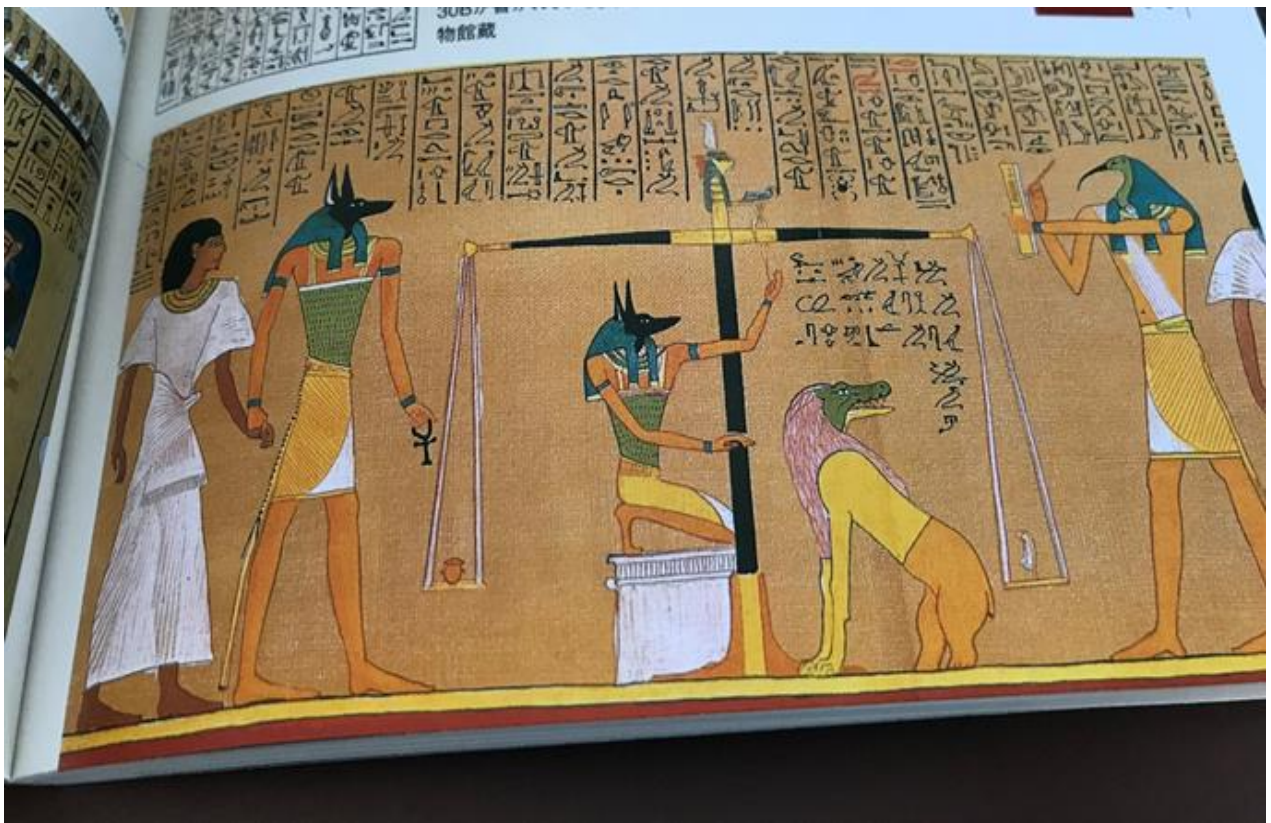


図 1. 一番左に立つ白い衣装の死者が、頭がジャッカルのアヌビス（左手に生命の象徴であるアネクを持っている）に手を引かれて自らの心臓（魂）が裁判にかけられているのを見ている。心臓は秤に乗っている壺に入っていてアヌビスが重さを測り、頭がトキのトトが書記を務めている。秤の足元にいる頭がワニ、上半身がライオン、下半身がカバのアミメトは生前の行いが悪かった者の心臓（魂）を食べる怪物。（村治 94）

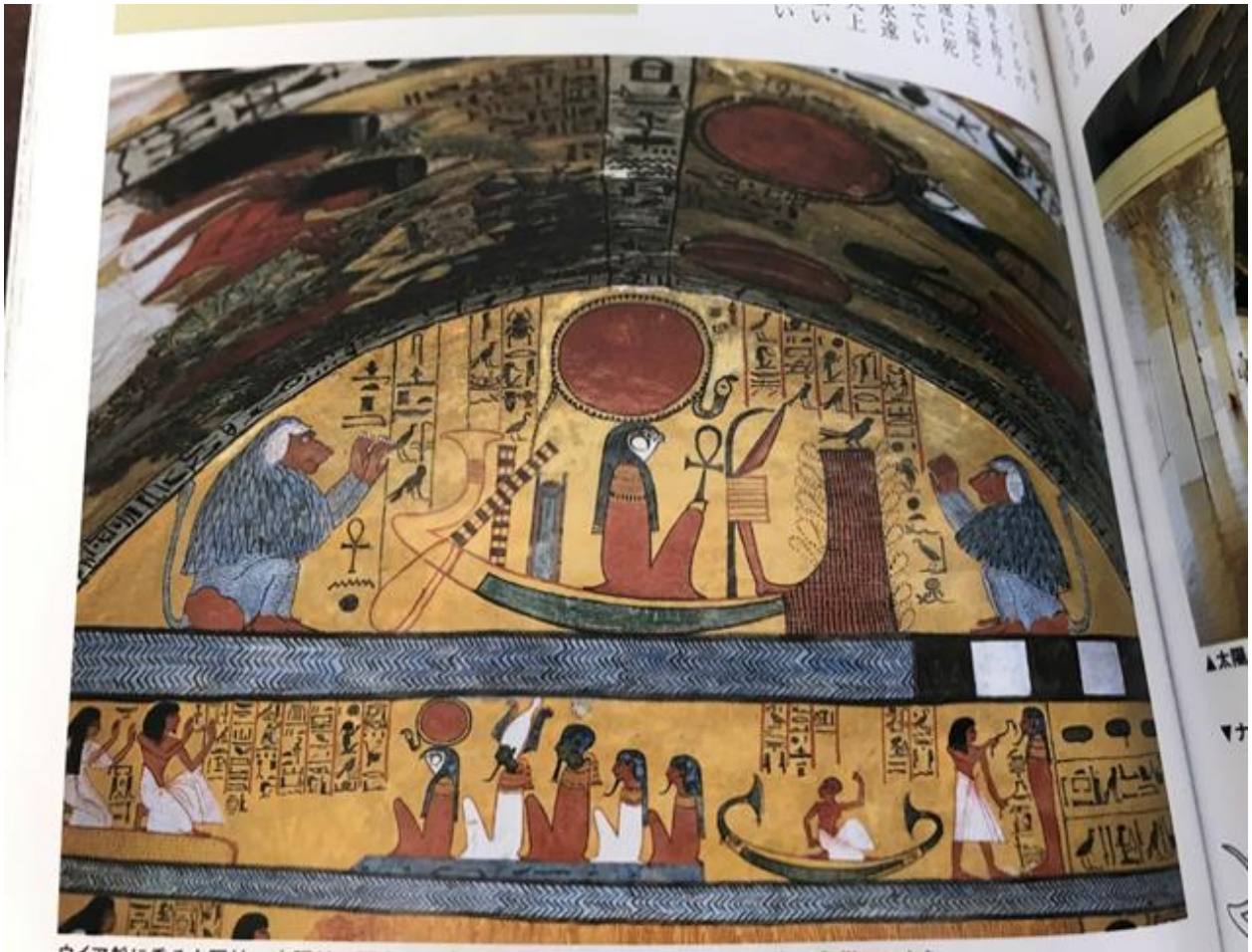


図2. 太陽神ラー（頭がハヤブサでコブラが巻き付いた日輪を頭に抱いている）が船に乗って黄泉の国を巡回する。（村治 69）

参考文献

- Bishop, John. *Joyce's Book of the Dark*. Wisconsin: Univ. of Wisconsin Press, 1986.
- Hayman, David. *The "Wake" in Transit*. New York: Cornell Univ. Press, 1990.
- Joyce, James. *A First-Draft Version of Finnegans Wake*. UD digital.
- Joyce, James. *Dubliners: Text and Criticism* ed. Robert Scholes and A. Walton Litz, New York: Penguin Books, 1996.
- Joyce, James. *Finnegans Wake*. New York: Penguin Books, 1939.
- Leerssen, Joep. *Irish Studies and Orientalism: Ireland and the Orient*. ed. C. C. Barfoot and Theo D'haen. Amsterdam: Rodopi, 1998, 161-174.
- Lennon, Joseph. *Irish Orientalism: A Literary and Intellectual History*. New York: Syracuse Univ. Press, 2008.
- Rose, Danis. *The Textual Diaries of James Joyce*. Dublin: Lilliput Press, 1995.
- Tymoczko, Maria. *The Irish Ulysses*. California: Univ. of California Press, 1994.
- ジョイス, ジェイムス著. 『抄訳 フィネガンズ・ウェイク』(訳)宮田恭子 東京:集英社, 2004.
- バッヂ, ウォリス著. 『世界最古の原点 エジプト死者の書』(訳)今村光一 東京:たま書房, 2009.
- 村治 笙子, 片岡直美著. 『図説 エジプトの「死者の書」』 東京:河出書房新社, 2002.
- 山田久美子著. 『ジェイムズ・ジョイスと東洋—「フィネガンズ・ウェイク」への道しるべ』東京:水声社, 2017.
- 山田久美子著. 『「フィネガンズ・ウェイク」の父と娘—イッシー, レインボウ・ガールズ, ルチア・ジョイス』, 『ことば・文化・コミュニケーション:異文化コミュニケーション学部紀要』第1号(2009), pp. 75-85.